

# 石坂養平

熊谷市郷土文化会 持田重男

「石坂養平」は、明治・大正・昭和を通じ文芸評論家、政治家、そして実業界で活躍。戦後は政界を退き、社会文化向上に尽くすなど、その一生は多彩だった。

石坂家の先祖は新田義貞から五代、上州金山城主、由良氏の郷土で戦国時代から桃山時代の頃土着したという。

氏は明治十八年大里郡奈良村中奈良の大地主、金一郎の長男として生まれる。幡羅高等小学校から熊谷中学校（現熊谷高校）に進む。また夏目漱石の「坊ちゃん」のモデルと言われている弘中又一に数学を教わった。明治三五年三月に熊谷中学校第三回生として卒業。在学中代数、幾何の成績が良く弘中又一坊ちゃん先生に大変褒められたのが原因で「数学の大家」となるべく仙台の第二高等学校二部（理科）に入学。父金一郎は法科（一部）に進むことを期待していたため失望した。

二高在学中は理科学生だりながら、元々好きな文学に対する情熱が表に出て、文学作品を耽読、トルストイの人道主義などの傾倒、学内の雑誌に投稿し二高の学生間では相当知られる存在となった。

明治四三年九月に東京帝国大学文科大学（哲学科）に入学、文科生となるや文学科の機関誌とも言うべき「帝国文学」に目をつけ一つこの雑誌に書いてみたいと思った。

明治四四年帝国大学在学中から大正中期にかけて各誌に作家論・文学論を発表した。卒業の頃は「帝国文学」の編集委員にも加わった。四五年「帝国文学」の「新自然主義の誕生」及び「鈴木三重吉論」を発表して中央文壇に、文芸評論家として認められた。

大正四年、祖父慶蔵が二月に、父金一郎が三月に相次いで他界。必然的に好むと好まざるとに関係なく郷里に帰り俗人的、政治的方面の生活を余儀なくされた。しかし、郷里にあっても大正一一年頃まで「文章世界」「早稲田文学」「中央公論」等に評論・随筆を発表し続けた。特に八年「帝国文学」に発表した「有島武郎論」で、有島と往復書簡を交わしたことは、文学史上知られていることである。

大正の後半に入り、地方の名望家として政界に進出すると共に、郷土の発展に尽力した。大正九年大里郡の県会議員補欠選挙に出て当選し、一一年には県会副議長に就任した。昭和三年に政友会に属し衆議院議員に初当選、以後、通算四期在職した。

政界に進出すると同時に地元産業組織の役職に就任し、次第にその活動範囲を地方から中央へ、農業から他産業へと拡大していった。

なお、政界、実業界に進出すると共に、地域青年の文化的育成にも情熱を傾けた。

昭和三年五月、別府村の三ヶ尻正夫氏（後年雄文閣社長）が発起人となり、田園文学研究をモットーに文芸雑誌「曙光」を発行した。氏は名誉賛助員となり、その会を「埼玉県曙光会」とした。一月に氏を中心とした熊谷の文化啓蒙団体「常磐会」誕生。常磐新聞発行。氏は当時大里郡青年団長の役にあり、それまでに培った文化的、芸術的、哲学的方面の名声は近隣に鳴り響き青年たちの憧れであった。

「曙光会」の活動は、本部を石坂邸に近い常楽寺に置き、創立総会には奈良、妻沼、深谷の青年団長クラスのリーダーが二百人も集まったという。氏は、各青年団の会報には必ず寄稿し、大所高所から指導助言をされることが、青年たちの評判となった。旧幡羅郡や熊谷方面から大勢の青年が集まり、県北の青年たちの一大修養団体に成長していった。

昭和一二年「曙光会」発表10周年を記念して会員の総意で、常楽寺境内に「石坂先生文章碑」を建設、除幕された。

碑文には、「今日の青年はどうしても政治経済社会の方面に研鑽努力の歩を進めなければならぬが～（以下略）『人生への愛は孤独より生じる』と題す古き論文の一節を記す」と結んでいる。

また陰記には。「曙光会」顧問の山口平八氏が、「先生ハ徳ノ人ナリ我等其ノ人格ヲ景仰スルコト深シ先生ハ筆ノ人ナリ～」と書いている。

氏は「筆ノ人」と言われているように、氏の撰文による記念碑や頌徳碑は近郷に沢山あるが、文章碑というのは珍しい。そこで、文章碑のことを聞いて見に来る人が毎日のようにあり、県視学も校長に案内されて見に来たという。

近隣の学校の校歌にも作詞している。奈良小、中、大幡小、大原中、別府中、熊谷東中、妻沼西中、東中、熊高である。

青年たちから神様の様に慕われていた石坂養平の人柄は外柔。内剛・郷土愛の深い人・徳のある人・心の綺麗な人・勉強家・読書家。（書斎はもちろん、家中に蔵書がいつ



石坂養平文章碑

ばい。特に古典、歴史、哲学、宗教関係など)

一つ難点を挙げれば、氏の文章は「難しくて読んでも解らない」という定評があった。それは哲学的または漢学的な専門用語がどんどん飛び出して来るからである。

戦後は、実業界で会社の取締役、監査役などの傍ら農業関係、神社関係の全国的な役職を、また県関係では、埼玉県文化団体連合会長、埼玉県社会教育委員、埼玉県公安委員長等を歴任した。

昭和三十一年十一月「古希の祝」を記念して熊谷市荒川区に常磐会から「寿碑」を贈られ建設。現在は集福寺に移設。

昭和三十七年三月熊谷市名誉市民（第二号）に推挙される。

昭和四〇年四月、勲二等瑞宝章を授与される（80歳）。

昭和四四年八月一六日逝去、八月二九日市民体育館で市民葬（墓所は下奈良集福寺）。

（熊谷市公連だより 第18号 平成26年より）